

Sengokuyama Journal
of Buddhist Studies
Vol. XI, 2019

仙石山仏教学論集 第11号 (令和元年)

中野是心版『大般若経』について
——『大般若経』卷一を中心として——

張
美
僑

中野是心版『大般若経』について

——『大般若経』巻一を中心として——

張 美 僑

要 旨

中野是心版『大般若経』（以下、中野版と略称する）は、日本近世初頭（十七～十八世紀）における京都で活躍した書肆の中野一族の一員である、中野是心（？～一六七七）によって、寛文十年（一六七〇）に印刷された刊本である。その版木は、後世の若山屋喜右衛門（生没年不詳）に継承され、その後釈祖芳輯『大般若経校異』の底本になった。

本論で取り上げる玄奘訳『大般若経』巻一のテキストは、玄則（七～八世紀）の「大般若経初会序」の有無によつて、主に写本系統と刊本系統に分けられる。さらに、文字を対照した結果、中野本は江南系統の開元寺本に限りなく近いものであることが判明した。従つて、中野本の底本は開元寺本である可能性が高い。最後に、中野本と開元寺本と比較した結果、異体字あるいは改行などの細かい特徴によつて、中野本において様々な微調整が施されたことが認められた。すなわち、中野本は単なる開元寺本の再版ではなく、これを底本としつつ、さらに手を加えた上で刊行されたものである。

以上の点から、日本では十七世紀に中国宋代の十二～十三世紀の福州版大藏経（開元寺版）を底本として、『大般若経』を改めて書写し、木版を作つて各地に流伝させたこと、つまり、宋版一切経テキストがある程度日本に継承されていた、という事実を確認することができた。

中野是心版『大般若経』（以下、中野版と略称する）は近世初頭（十七〜十八世紀）における京都で活躍した書肆の中野一族の一員である、中野是心（？〜一六七七）によって、寛文十年（一六七〇）に印刻された刊本である。筆者は「釈祖芳輯『大般若経校異』について」において、江戸時代の京都妙心寺の禅僧・釈祖芳（一七三二〜一八〇六）が著した『大般若経校異』（以下、『校異』と略称する）を取り上げた際に、釈祖芳が『大般若経』の校異にあたって底本に用いた中野本にも言及した^①。しかし、中野版自体の基礎的研究は未だなされていない。本稿は、中野版の成立、流伝を考察し、中野版『大般若経』巻一（以下、中野本と略称する）を取り上げ、テキストの系統を解明した上で、中野本の底本を明らかにして、中野版が如何にして作られたのを検討する。

一、中野是心版『大般若経』の成立と流伝

『奈良県所在近世の版本大般若経調査報告書』本文篇（以下、『報告書』と略称する）によれば、現在確認されている中野版『大般若経』には、六〇〇巻の末尾に異なる三種類の刊記があるという。

- ① 「寛文十庚戌仲冬吉日／中野氏は心板行／板木細工人／藤井六左衛門」（奈良県・靈山寺等、計九カ所で所蔵）
- ② 「寛文十庚戌仲冬吉日／中野氏は心始開経版／安永五丙申年十二月／京烏丸通四條上ル二町目／若山屋喜右衛門求版」（奈良市三碓町・多聞院等、計三カ所で所蔵）
- ③ 「寛文十庚戌仲冬吉日／中野氏は心始開経版／京寺町五条上ル町西側／皇都書店 藤屋宗左衛門／同處／同勘十郎 與」（奈良県御所市伏見・菩提寺等、二カ所で所蔵）^②

これらの刊記から、中野版が中野是心という人物によって寛文十年（一六七〇）に印刻されたこと、後に若山屋喜右衛門（生没年不詳）がその版木を買い取って重刷したこと、さらに藤屋宗左衛門（詳細は後述）によって再度出版されたことが看取される。

本章では、この三種類の刊記を他の資料と勘案し、中野版の成立と流伝を検証、考察していく。

まず刊記①に関して、筆者は二〇一九年四月十九日に某氏から個人蔵の中野版『大般若経』第一巻と第六百巻を閲覧する機会を賜り、中野版の実物を手に取って、『報告書』などの記載と検証することが可能となった。

この中野版の巻六〇〇の末尾に、以下の刊記が記されている。

「寛文十庚戌仲冬吉日／中野氏は心板行／板木細工人／藤井六左衛門」

これは『報告書』に記載されている刊記①の中野版と完全に一致するものである。また、同中野版の巻一に、以下の墨書識語が記されている。

「讚州香河郡坂田村室不動堂法照山／觀興寺悉地院敕許大僧都智翁求之／于時享保四己亥八月朔日」

すなわち、この中野版は讚州の香河郡坂田村（現在の香川県高松市）觀興寺の釈智翁（生没年不詳）が、享保四年（一七三三）八月一日に求めて獲得したものである。

また刊記②に関して、中野版を底本として、『大般若経』の校異を行った釈祖芳は『校異』において、中野版について、以下のように書いている。

中野是心版『大般若経』について（張）

平安城京極街書肆、中野是心者患大都未有般若印版。常以是爲念。偶獲古印刻全本。寛文十年庚戌之冬、遂以翻刻一新。是神京般若開刻之權輿。其功實不爲尠也。印版都四千四百枚、一百年來、流布大方。安永五年丙申、其版、轉在於烏丸街錦小路北、近藤氏爲貞居士家。然此本、未歷校讐之手。魚魯或有。是故、囑余訂之。而不允辭。

（平安城京極街書肆、中野是心なる者の大都に未だ般若の印版有らざるを患ふ。常にはこれを以て念と爲す。偶たま古印刻の全本を獲たり。寛文十年庚戌の冬、遂に以て翻刻一新す。是れ神京般若開刻の權輿なり。其の功實に尠しと爲さざるなり。印版都て四千四百枚、一百年來、大方に流布す。安永五年丙申、其の版、烏丸街錦の小路の北、近藤氏爲貞居士の家に轉在す。然るに此の本、未だ校讐の手を歴す。魚魯或は有り。是の故に、余に囑して之れを訂せしむ。而して辭すること允さず。）

これによれば、京都の書肆、中野是心によつて寛文十年に印刻された四千四百枚の版本は、安永五年（一七七六）に烏丸街錦の小路の近藤爲貞居士の家にすべて移され、釈祖芳がそれを底本とし、『校異』に着手したという。また、『校異』の末尾の刊記には、

「寛政四年壬子秋九月／京師烏丸街錦小路上町／般若堂若山屋喜右衛門印行」

とある。これと、上述の刊記②「京烏丸通四條上ル二町目／若山屋喜右衛門求版」と合わせて考えれば、『校異』の底本はまさに安永五年に近藤爲貞居士の家に移された中野版であり、般若堂若山屋喜右衛門による求版である

と言えよう。

川瀬一馬『日本書誌学用語辞典』は「求版本」について、「最初出版した版元の版木を買い取って、それで重刷した本をいう。江戸中期以後、刊記に求版と追刻したものが多く見られる」と説明している。^③これによって、刊記②の「若山屋喜右衛門求版」は、最初に出版した刊記①の中野版と同一の版木と考えられる。すなわち、『校異』の底本である刊記②の中野版（若山屋喜右衛門求版）は、刊記①を持つ中野版（享保四年に観興寺に納められた中野版）の内容と同じであると推定される。

次に刊記③に関して、日下幸男は、『中野本・宣長本刊記集成』において井上和雄『慶長以来書買集覽』の記述を引用しつつ、以下のように述べる^④（傍線筆者）。

中野 市右衛門 「名は道伴 豊雪齋 元和く寛文く京都寺町通四条ル」

(…中略…)

同 小左衛門 「豊興堂 初代道也 寛永く享保く京都三条通寺町西入 後寺町五条く上ル町に移れり」

初代小左衛門は道伴の弟なり、三代小左衛門は宝永二年十月九日歿す年卅二、法名閑月は松信士、了蓮寺に葬れり〔新村博士の筆録に拠る〕 京羽二重（貞享二）に真言宗とし 国花万葉集（元禄十）には物之本屋とす、当時は藤屋と称したりけむ、買物調方三合集覽（元禄五）に経師屋として

新板之大般若経 六百卷

寺町五条上ル 藤や 中野小左衛門

(…後略…)

中野是心版『大般若経』について（張）

注目すべきは、中野小左衛門の条に、「寺町五条上ル 藤や 中野小左衛門」によって「新板之大般若経 六百卷」（傍線部）が刊行されたという記録があることである。中野小左衛門の初代は寛文二年（一六六二）に亡くなったので、元禄十年（一七〇三）まで活躍した「藤屋」「経師屋」は、三代目の中野小左衛門を指すものであり、彼が新版の『大般若経』を刊刻した人物であろう。そして、この「寺町五条上ル 藤や 中野小左衛門」は上述の刊記③の「寺町五条上ル町」と一致するので、三代目の中野小左衛門（一六七四～一七〇五）と「藤屋宗左衛門」とは、同一人物ではないかと思われる。

また、安藤武彦の「出版書林中野道伴伝関係資料」には、「直菴是心居士 十一月四日／本屋小左衛門父／延宝五年丁巳」とある。^⑤延宝五年（一六七七）没の「直菴是心居士」は、七年前の寛文十年の冬に、『大般若経』を翻刻一新した中野是心と、まさに同一人物と言える。そして、この中野是心は三代目の中野小左衛門の父親と考えられる。もしこの「藤屋宗左衛門」が父親である中野是心の原版を持っていたのだとすれば、改めて再版する必要はないのではないか。あるいは別の推測として、「藤屋宗左衛門」が若山屋喜右衛門から版木をまた買い求めた可能性が考えられる。ただし、刊記③「寛文十庚戌仲冬吉日／中野氏は心始開経版／京寺町五条上ル町西側／皇都書店 藤屋宗左衛門／同處／同 勘十郎 與」の内容が示すように、こちらの版木と刊記①の中野版とは、同一版木と考えられる。

以上考察した結果を纏めると、以下のようになる。

- 1 中野版の成立年代は『校異』に書いてあるように、寛文十年である。
- 2 中野版は三つの刊記が存在するが、本文自体はみな同じ版木である。
- 3 刊記①を持つ中野版は奈良県に所蔵されている他に、享保四年に讃州の香河郡の観興寺に納められたものがある。

4 安永五年に若山屋喜右衛門によって再印された刊記②の中野版は、積祖芳が『校異』で底本とした版である。
5 中野版の刊刻者は、近世初頭における京都で活躍した書肆の中野一族の一員、中野是心であり、彼の息子の「藤屋宗左衛門」(三代目中野小左衛門)は、後に中野版を再び印刷した。⁽⁷⁾

二、『大般若経』のテキストの系統と中野版の底本

『大般若経』は六百巻に及ぶため、本章では第一巻を取り上げて、中野版と、刊本大蔵経、敦煌写本、日本古写経に現存が確認されている諸本との校異を行う。さらに中野本のテキストが如何なる系統に連なるものであるか、底本が何であるかを解明する。

(一) 諸本校異の底本と校本

校異の底本として、前節で言及した刊記①を持つ個人蔵の中野版『大般若経』巻一を使用する。この中野本の書誌は、以下の通りである。

【書誌】 巻一

【外題】 大般若波羅蜜多經卷一

【内題】 大般若波羅蜜多經卷第一 天

【尾題】 大般若波羅蜜多經卷第一 天

【形態】 刊本

中野是心版『大般若経』について(張)

中野是心版『大般若経』について（張）

〔年代〕 江戸時代

〔装幀〕 折本（二〇八折）

完本。全二十四紙。一紙四～五折、一折四～五行、一行十七字

〔法量〕（表紙）縦 二十六・六cm 横 九・四cm

（第二紙）縦 二十六・三cm 横 四十・八cm

〔界線〕 なし

〔料紙〕 楮紙

〔墨書識語〕

讃州香河郡坂田村室不動堂法照山

觀興寺悉地院敕許大僧都智翁求之

于時享保四己亥八月朔日

〔見返し絵〕 あり（十六善神）

〔刊記〕 なし

中野本と比較する校本として、次下の十一本のテキストを三つの基準によって選定した。すなわち、第一に、漢文大蔵経の中の代表的なもの。第二に、巻一が現存しているもの。第三に、実物、写真、影印資料が確認できるもの、という基準である。

それらのテキストの概観は以下の通りである。

〈写本〉

敦煌写本^⑧

① 大英博物館蔵 S. 3755 (完本。九世紀から十世紀)^⑨

② 中国国家図書館蔵 BD. 06687 (「大唐三藏聖教序」に二十字程度の欠あり。八～九世紀)^⑩

③ 西北師範大学蔵敦煌文献 西北師大 003 (完本。七世紀以後)^⑪

日本古写経

① 大阪府河内長野市・天野山金剛寺甲本 (完本。十～十二世紀)

② 大阪府河内長野市・天野山金剛寺乙本 (完本。十二世紀)^⑫

③ 京都市上京区・圓通山興聖寺本 (完本。十四世紀)^⑬

〈刊本〉^⑭

中原の開宝蔵系

① 【高麗再雕本】 国際仏教学大学院大学附属図書館蔵高麗再雕版『大般若経』卷一 (一一三六～一二五一年)

北方の契丹蔵系

① 【石経本】 『房山石経』の唐代刻経の『大般若経』卷一 (七四二年)^⑮

宋元時代の江南系諸蔵

① 【東禪寺本】 宮内庁書陵部収蔵の東禪寺版 (http://db.sido.keio.ac.jp/kanseki/T_bib_frame.php?id=007075-001) にあるの『大般若経』卷一 (一〇八〇～一一二二年)

② 【開元寺本】 醍醐寺蔵宋版一切経 (開元寺版) の『大般若経』卷一 (一一二二～一一五一年)^⑯

③ 【思溪版 (復刻本)】 『宋版思溪蔵』の復刻本の『大般若経』卷一 (一二四一～一二五二年)^⑰

以上のように、本章は巻一が現存されている敦煌写本三点、日本古写経の金剛寺一切経の二点(甲、乙本)と興聖寺一切経の一点、高麗再雕藏、契丹藏に關係がある房山石経の唐代刻経、成立年代の古い宋版の福州東禪寺版、開元寺版、思溪版の復刻本、計六写本、五刊本を用い、諸本校異を行う。

(二) 玄則の序文の有無

『大般若経』のテキストの系統の考察に進む前に、まずは本経の全体的な構成を説明しておきたい。本経は全六百巻があり、十六会に分けられる。また、各会の正文の前に、序文が付されている。本稿が巻一を取り上げる理由は、巻一の方が巻六百より、多くの情報を持つためである。

巻一のテキストは序文と本文の二つに分かれている。その序文はさらに三つの部分に分けられている。それらは唐太宗(在位…六三〇～六四九年)の「三藏聖教序」、当時の太子である李治(唐高宗。在位…六四九～六八三年)の「述聖記」、及び玄則(七～八世紀)が製作した『大般若経』十六会の序文である。¹⁸⁾

附録1の『大般若経』諸テキストにおける序文の有無一覽¹⁹⁾から分かるように、『大般若経』の各テキストの構成の相違点は三つの序文の収録状況によって鮮明になる。具体的に言うと、刊本大藏経の高麗再雕本と東禪寺本、開元寺本の『大般若経』の経首には太宗、高宗の序文があり、また、各会の冒頭に玄則の序文が見られる。¹⁹⁾ それに対して、敦煌写本の三本と日本古写経の三本は、『大般若経』の経首に太宗、高宗の序文はあるが、各会の冒頭に玄則の序文は付されていない。

巻一には、十六会序の最初の初会序が書かれている。中野本は刊本系と同様に、太宗の序文、高宗の序文、そして玄則の大般若経初会序、三つとも揃っている。従って、玄則の序文の有無によって、中野本は刊本系に近いと考えられる。

(三) 本文の校異

附録2の諸本校異一覧表に諸本間の違い、計十八ヶ所を示し、その中で、重要な手掛かりとなっている例を分析する。まず、底本の中野本の「智慧通達」箇所について、写本系では、みな「智善通達」となっているのに対して、刊本系は底本と一致し、それぞれ、「智慧通達」となっている。この箇所から、中野本は、刊本系に近いと考えられる。

次に、底本の「零露」「正命常現」「無煩天」の三箇所について、写本のうち、興聖寺本は「正命常現」「無煩天」に関して、刊本系の江南系統と一致しており、「雲露」に関しては、写本系と一致している。他の四本はみな「雲露」「正命常現」「無煩天」となっているにも関わらず、刊本系の中の高麗再雕本、石経本も写本系と一緒に「正命常現」「無煩天」となっている。刊本系の江南系統だけは「零露」「正命常現」「無煩天」となっているので、中野本は刊本系の中の江南系統の三本に近いと言えよう。

さらに、底本の「聰敏」の箇所について、諸本のうち、中野本と一致するのは、開元寺本のみである。他のテキストはすべて「聰令」となっているが、開元寺本だけが「聰敏」となっている。この点から、中野本は、刊本系の江南系統の開元寺本に近いと言える。

以上、諸写本、刊本のテキストの校異を行い、校本の写本六種及び刊本五種と対照し、中野本のテキストが如何なる系統に連なるものであるかを解明した。

校異の結果から分かることを纏めると、以下の通りである。

- 1 玄則の「大般若経初会序」の有無によって、『大般若経』巻一は、主に写本系統と刊本系統に分けられる。
- 2 中野本は刊本系の江南系統本の中の開元寺本に属し、底本は開元寺本と想定される。

三、中野是心版は如何にして作られたか

上述したように、中野版は平安城京極街の書肆の中野是心が、京都にまだ般若経の印板がないことを残念に思い、たまたま古い印刷本の全本を手に入れたため、寛文十年庚戌の冬に翻刻したものである。諸本を校異した結果より、卷一に限ってはあるが、中野版は開元寺版に近いことが見えてきた。

現在、日本に現存する開元寺版は以下の七ヶ所に所蔵されている。²⁰⁾

- ① 宮内庁書陵部 東禪寺・開元寺の混合蔵 六二六三帖（『大般若経』卷一は東禪寺版）
- ② 金沢文庫 二二一六帖（『大般若経』卷一は東禪寺版）
- ③ 教王護国寺（東寺） 五五六帖（『大般若経』卷一は開元寺版）
- ④ 知恩院 四九四〇帖（『大般若経』卷一は開元寺版）
- ⑤ 醍醐寺 六五五帖（『大般若経』卷一は開元寺版）
- ⑥ 中尊寺 二二七帖（『大般若経』卷一は欠本）
- ⑦ 本源寺 二五五帖（『大般若経』卷一は欠本）

このうち、開元寺版『大般若経』卷一が現存しているのは③東寺本、④知恩院本と⑤醍醐寺本の三つである。野沢佳美氏によれば、東寺本と知恩院本の卷一の題記の冒頭の一行目は異なっているという。²¹⁾ 知恩院本と醍醐寺本の卷一の題記の内容は一致しているので、両本は同じ版木の印本と考えられる。醍醐寺蔵開元寺版は重源上人（一一二一～一二〇六）が建久六年（一一九五）に寄進した宋版一切経である。²²⁾ その当該『大般若経』卷一は總本山醍醐寺編『醍醐寺蔵宋版一切経目録』別冊 影印篇の中に載せられているので、本章では、中野本とさらに比較

し、中野版が開元寺本を底本として如何にして作られたのを突き止めたい。

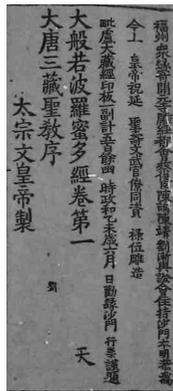
① 刊刻題記の有無

開元寺版が有する刊刻題記は残されているが、中野版巻一の序文の前に刊刻題記は、見当たらない。

② 経題の下の刻工人名の有無

開元寺版には「大般若波羅蜜多經卷 第一 天」の次行に、「劉」という刻工人名が見られるが、中野版には見られない。

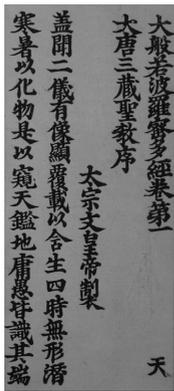
開元寺版



刊刻題記あり

「劉」という刻工人名があり

中野版



刊刻題記なし

「劉」という刻工人名がなし

③ 版心の文字の有無

開元寺版では版心に、千字文、巻数、紙数、刻工人名情報が書かれている。これに対して、中野版の該当箇所では見当たらない。

④ テキストの改行の相違

中野是心版『大般若経』について(張)

経文の中で、開元寺本では最初から最後まで、改行しないのに対して、中野本では「爾時」の七箇所改行する。また、開元寺本では「大般若経初会序／西明寺沙門玄則製」「大般若波羅蜜多経卷第一／三蔵法師玄奘奉詔訳／初分縁起品第一之一」と改行しているが、中野本では「大般若経初会序西明寺沙門玄則製」「大般若波羅蜜多経卷第一／初分縁起品第一之一三蔵法師玄奘奉詔訳」としている。表1を参照。

⑤ 異体字の相違

中野本では「花」「礼」「号」とする箇所に対して、開元寺本は「華」「禮」「號」としている。表2を参照。
⑥ 筆法の相違

中野本と開元寺本の両本の文字の書き方はすべて異なっている。「大般若経波羅蜜多経卷第一」のタイトルの部分を例として、比較した結果は表2を参照。「般若」の「般」の字は、最初の画から、両本ですでに異なっており、また、「若」「密」「経」の三文字も書き方が全く相違している。

諸本校異の結果、中野本と開元寺本との間に文字の相違は見られないが、版式や字体の上では、上述の①～⑥のような相違点が見られた。しかし、これらの相違は何れも編集の方針にかかわるものと考えられ、中野本の底本として開元寺本以外のものが用いられたことを示唆するものではない。文字を対照した結果から、中野本のテキストは限りなく開元寺本に近いものであると想定される。

さらに、中野本が開元寺本を底本として具体的にどのような手順で作られたのかについては、やはり釈祖芳の『校異』の記述「偶獲古印刻全本、寛文十年庚戌之冬、遂以翻刻一新」の通りであろう。中野是心が手に入れたこの古印刻の全本は恐らく開元寺版であり、それを覆刻(テキストを版木に彫刻)して中野版を作ったのであろう。

四、おわりに

従来、中野是心版大般若経については、京都の書肆の中野一族のうちの一人である、中野是心という人物によって寛文十年に刊刻されたということ以上の詳細は明らかに成っていない²⁵。

本稿において、中野是心によって刊刻された『大般若経』の版木は、後世の若山屋喜右衛門に継承され、さらに『校異』の底本になったことが確認された²⁶。

さらに、『大般若経』巻一を例として、中野版のテキストの系譜を究明した。その成果として、諸系統本の相互関係を明示すべく、附録3の系統図を作成した。

系統図から分かるように、玄則の「大般若経初会序」の有無によって、『大般若経』巻一のテキストは写本と刊本の間で系統が異なることが明白となった。また、興聖寺本は敦煌写本、金剛寺両本より、江南系統に近く、石経本は写本系に属し、高麗再雕本は江南系統本より、写本系に近いという結論に達した。そして、文字を対照した結果、中野本は限りなく江南系統の開元寺本に近いものであると想定されるので、開元寺本は中野本の底本と言えるであろう。

最後に、中野本と開元寺本と比較した結果、異体字あるいは改行などの細かい特徴において、中野本が様々な微調整を行ったことが認められる。従って、中野本は開元寺本を底本としたが、開元寺本を再印したのではなく、それを底本として日本で作られた刊本『大般若経』であるという結論に至った。

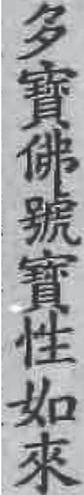
『大般若経』巻一について、中野版は開元寺版を底本に用いて作られたことから、残りの五九九巻も、恐らく、開元寺版によって作られた可能性があると推測されるが、他巻において同様の検証をする必要がある。さらに、

中野是心版『大般若經』について（張）

表1 中野本と開元寺本における改行の相違

中野本	開元寺本
<p>菩薩大莊嚴菩薩摩訶薩莊嚴王菩薩摩訶薩 山峯菩薩摩訶薩寶峯菩薩摩訶薩德王菩 薩摩訶薩慈氏菩薩摩訶薩如是等無量百 千俱胝那由多菩薩摩訶薩皆法王子堪紹 佛位而為上首</p> <p>今時世尊於師子座上自歎足師壇結跏趺 坐踞身正願住對面念入等持王妙三摩地 諸三摩地皆攝入此三摩地中是所流故余 時世尊正知正念從等持王安座而起以淨 天眼觀察十方宛伽沙等諸佛世界舉身怡 悅從兩足下千輪軸相各放六十百千俱胝 那由多光從十指兩腋兩跟四跟兩脛兩 膺兩膝兩脛兩股兩臍兩背膺中心上兜羅</p>	<p>開元寺本</p> <p>菩薩大莊嚴菩薩摩訶薩莊嚴王菩薩摩訶薩 山峯菩薩摩訶薩寶峯菩薩摩訶薩德王菩 薩摩訶薩慈氏菩薩摩訶薩如是等無量百 千俱胝那由多菩薩摩訶薩皆法王子堪紹 佛位而為上首今時世尊於師子座上自歎 足師壇結跏趺坐踞身正願住對面念入等 持王妙三摩地諸三摩地皆攝入此三摩地 中是所流故今時世尊正知正念從等持王 安座而起以淨天眼觀察十方宛伽沙等諸</p>
<p>圓教豈臻所以 帝敕金照 皇述瓊振事</p> <p>鎮自非 聖德遠單哲人孤出則玄音罕貴</p> <p>被人天括覆真俗誠入神之奧府有國之靈</p> <p>大般若經初會序 西明寺沙門 玄則 製</p> <p>大般若經者乃希代之絕唱曠劫之趨津光</p> <p>御製衆經論序照古騰今理會金石之聲文</p> <p>抱風雲之潤洽軌以輕塵足岳墜露添流略</p> <p>舉大綱以為斯記</p> <p>大般若經初會序 西明寺沙門 玄則 製</p> <p>大般若經者乃希代之絕唱曠劫之趨津光</p> <p>御製衆經論序照古騰今理會金石之聲文</p> <p>抱風雲之潤洽軌以輕塵足岳墜露添流略</p> <p>舉大綱以為斯記</p>	<p>之明 我皇福臻同二儀之固伏見</p> <p>御製衆經論序照古騰今理會金石之聲文</p> <p>抱風雲之潤洽軌以輕塵足岳墜露添流略</p> <p>舉大綱以為斯記</p> <p>大般若經初會序 西明寺沙門 玄則 製</p> <p>大般若經者乃希代之絕唱曠劫之趨津光</p> <p>御製衆經論序照古騰今理會金石之聲文</p> <p>抱風雲之潤洽軌以輕塵足岳墜露添流略</p> <p>舉大綱以為斯記</p>
<p>品矣或謂權之方土理宜裁譯竊應之曰一 言可蔽而雅頌之作聯章二字可題而涅槃 之音稍軸優柔關綏其慈誨乎若譯而可削 恐貽患於傷手今傳而必本庶無識於溢言 沉擱札之辰慨念增損而魂交之夕烟戒昭 彰終始感現具如別錄其有大心茂器又聞 歷奉者自致不驚不怖妄謗妄度矣</p> <p>大般若波羅蜜多經卷第 初分緣起品第一 三藏法師 玄奘奉 詔譯</p> <p>如是我聞一時薄伽梵住王舍城鷲峯山頂 與大慈覺眾千二百五十人俱皆阿羅漢諸</p>	<p>品矣或謂權之方土理宜裁譯竊應之曰一 言可蔽而雅頌之作聯章二字可題而涅槃 之音稍軸優柔關綏其慈誨乎若譯而可削 恐貽患於傷手今傳而必本庶無識於溢言 沉擱札之辰慨念增損而魂交之夕烟戒昭 彰終始感現具如別錄其有大心茂器又聞 歷奉者自致不驚不怖妄謗妄度矣</p> <p>大般若波羅蜜多經卷第 初分緣起品第一 三藏法師 玄奘奉 詔譯</p> <p>如是我聞一時薄伽梵住王舍城鷲峯山頂 與大慈覺眾千二百五十人俱皆阿羅漢諸</p>

表2 中野本と開元寺本における異体字と筆法の相違

異体字	異体字	異体字	筆法	筆法	筆法	
			 天	 	 	中野本
			 天	 	 	開元寺本

本稿によって、日本では十七世紀に、中国宋代の十二〜三世紀の福州版大藏經(開元寺版)を底本として『大般若經』を改めて書写し、木版を作つて各地に流伝させたこと、つまり、宋版一切經テキストがある程度日本に継承されていた、という事実を確認することができた。

註

- (1) 拙稿「釈祖芳輯『大般若經校異』について」(『印度學佛教學研究』第六八卷第一号、二〇一九年、一三八〜一四一頁)を参照されたい。
- (2) 「近世の版本大般若經調査一覽」、奈良県教育委員会事務局、文化財保存課編『奈良県所在近世の版本大般若經調査報告書』本文篇所収(奈良県教育委員会、二〇〇五年、七〇〜一二六頁)。
- (3) 川瀬一馬『日本書誌学用語辞典』(雄松堂出版、一九八二年、八一頁)。
- (4) 日下幸男『中野本・宣長本刊記集成』(龍谷大学仏教文化研究所個人研究報告書、二〇〇四年、二〜三頁)。
- (5) 安藤武彦「出版書林中野道伴伝関係資料」(『日本古書通信』三七六、一九七五年、一三頁)。
- (6) 同右。
- (7) しかし、再印の「若山屋喜右衛門求版」と後印の「藤屋宗左衛門」本は、印刷した際に、百パーセント原版木によつたのか、部分的に改修したかどうかは、現時点で把握することができない。
- (8) これら三つの他に、敦煌写本には、また
 - ④大英博物館蔵S.4818(尾欠。太宗の「大唐三藏聖教序」の一部のみ現存)
 - ⑤中国国家図書館蔵BD.03253(首尾欠)
 - ⑥中国国家図書館蔵BD.05643(首尾欠)

の三つの所在が確認できるが、これらはすべて不完全であるので、今回の校異には用いない。各本の影印写真はそれぞれ、『敦煌宝藏』第三十八冊（新文豐出版社、全一四十冊、一九八一～一九八六年）、『国家図書館藏敦煌遺書』第四十四冊、第七十六冊（北京図書館出版社、二〇〇五～二〇二二年）を参照。

- (9) S375本の末尾に、「三界寺藏経」の印と「僧法濟勘」の識語が見られる。土肥義和『燉煌氏族人名集成…八世紀末期～十一世紀初期』（汲古書院、二〇一五～二〇一六年、一一三頁）には、「法濟」に関する諸写本は九世紀のもとして記録されている。また、三界寺藏経の先行研究によれば、晚唐五代の三界寺の張道真（生没年不詳）が長興五年（九三四）頃に、大藏経を尋ね求めたことがあったという（鄭炳林「晚唐五代敦煌三界寺藏経研究」、同氏主編『敦煌帰義軍史專題研究三編』、甘肅文化出版社、二〇〇五年、三〇～三二頁）。これらにより、S375本は九世紀から十世紀の写経と考えれば無難であろう。

- (10) 方廣鋁主編、李際寧、黄霞副主編『中國國家図書館藏敦煌遺書總目錄』第四冊（中國人民大学出版社、二〇一六年、三九六四～三九六五頁）を参照。

- (11) 西北師大CCSの解題によれば、武周新字の「囿」の文字が見られる（『甘肅藏敦煌文獻』第三冊、甘肅人民出版社、一九九九年、三六〇頁）。従って、写本の年代の上限は六九四年であるとの想定が可能である。下限は不明であるので、とりあえず七世紀以後のものとした。

- (12) 落合俊典『金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究』第二分冊（文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、二〇〇七年、七～九八頁）。

- (13) 京都府教育委員会編『興聖寺一切経調査報告書』（京都府教育委員会、一九九八年、三三三頁）。

- (14) 各本の書誌情報は附録2の凡例の所を参照。

- (15) 唐代刻経には、『大般若経』卷九、二十、四十などに年代を示す題記が見られる。林元白氏は、現存する『大般若経』

中野是心版『大般若経』について（張）

中野是心版『大般若経』について(張)

九三

の題記の年代により、本経の刻造開始時期が開元末年であるという可能性を示した。後に、氣賀澤保規氏は、最初をなす巻九の天宝元年(七四二)の題記に記載されている「條三二」と、巻十三の題記に記載されている「條三四」の記述から、年平均で十四卷、三六條の石経を刻まれたことに不都合が生じないという理由で、『大般若経』の刻出の開始年代を天宝二年に決着させた。林元白「房山石経初分過目記」、『唐代房山石経刻造概況』(呂鐵鋼主編『房山石経研究』、中国仏教文化出版有限公司、一九九九年、一六〇―一七頁、一六九頁)。氣賀澤保規編『中國佛教石経の研究』房山雲居寺石経を中心に』(京都大学学術出版会、一九九六年、七七頁)。

- (16) 東禪寺版、開元寺版については、『日本古典籍書誌学辞典』(一九九九年、岩波書店、四一、九二頁)、野沢佳美「宋・福州版開元寺蔵の題記について―整理と問題点―」(『立正大学文学部論叢』一二九、二〇〇九年、四五頁)、池麗梅『続高僧伝』研究序説―刊本大蔵経本を中心として』(『鶴見大学仏教文化研究所紀要』十八、二〇一三年、二三三―二二四頁)を参照。

- (17) 思溪蔵の復刻本は中国国家図書館と国際仏教学大学院大学との共同編集によるものである。中国国家図書館が所蔵する思溪蔵は、清末の楊守敬(一八三九―一九一五)が、京都の法金剛院所蔵の思溪版四三〇〇帖ほどを中国に持ち帰ったものと、後に中国で購入した三百帖ほどを合わせたものである。李際寧によれば、二〇〇二―二〇〇三年の間に、三三七帖の『大般若経』が同図書館に入蔵されたが、李際寧「国図新入蔵思溪版『大般若波羅蜜多経』的経過及其文物版本価値」『仏教大蔵経研究論稿』(宗教文化出版社、二〇〇七年、一七一―一八四頁)、巻一に関しては、韓国某地に所蔵される後思溪蔵であるという(これは、落合俊典先生を経て、李際寧先生に尋ねた答えである。ここで、二先生に深謝致します。また、池麗梅、上杉智英、定源(王招国)三先生の有益なアドバイスに、お礼を申し上げます)。

- (18) 玄則の「十六会序」は一度単行本として流伝したが、後に『大般若経』の各会の冒頭に分散して配置されたものと推測される。玄則の「十六会序」のテキストについては、別稿に譲る。

- (19) 石経本には序文は付されていないが、その理由は次のように推測される。すなわち、房山石経の発願者である隋代の静琬（?～六三九）は、末法の到来を意識し、仏典を永遠に伝えようとする護法の目的で、刻経事業を行ったのであり、仏典を流布せしめるという目的には、（經典の）序文は必要ではないと判断したのではないだろうか。
- (20) 野沢佳美「宋・福州版開元寺蔵の題記について―整理と問題点―」（『立正大学文学部論叢』一二九号、二〇〇九年、四七頁）。
- (21) 同右、五三頁。
- (22) 總本山醍醐寺編『醍醐寺蔵宋版一切経目録』第一冊、醍醐寺蔵宋版一切経解題（一）（汲古書院、二〇一五年、一四頁）。
- (23) 總本山醍醐寺編『醍醐寺蔵宋版一切経目録』別冊 影印篇（汲古書院、二〇一五年、三三～四三頁）。
- (24) 本論文で利用した開元寺本は醍醐寺蔵宋版一切経（開元寺版）の影印本（總本山醍醐寺編『醍醐寺蔵宋版一切経目録』別冊 影印篇、汲古書院、二〇一五年）三二頁からの転載である。以下、表1は三六頁、表2は三、三七、三八頁からの転載。
- (25) 稲津信子「大和における近世以降の大般若経の展開―調査報告―」奈良県教育委員会事務局、文化財保存課編『奈良県所在近世の版本大般若経調査報告書』本文篇所収（二〇〇五年、一二頁）。
- (26) 中野是心の息子の「藤屋宗左衛門」（三代目中野小左衛門）が後に再び印刷した中野版については、また改めて考察する必要があると考えられるが、今後の課題とする。

参考文献

安藤武彦「出版書林中野道伴伝関係資料」（『日本古書通信』三七六、一九七五年、一三頁）

中野是心版『大般若経』について（張）

中野是心版『大般若經』について(張)

九四

川瀬一馬『日本書誌学用語辞典』(雄松堂出版、一九八二年)

氣賀澤保規編『中國佛教石經の研究・房山雲居寺石經を中心に』(京都大学学術出版会、一九九六年)

京都府教育委員会編『興聖寺一切経調査報告書』(京都府教育委員会、一九九八年)

林元白「房山石經初分過目記」、「唐代房山石經刻造概況」(呂鐵鋼主編『房山石經研究』、中国仏教文化出版有限公司、一九九九年、一六六～一七頁、一六九頁)

『甘肅藏敦煌文獻』第三冊(甘肅人民出版社、一九九九年)

日下幸男『中野本・宣長本刊記集成』(龍谷大学仏教文化研究所個人研究報告書、二〇〇四年)

鄭炳林「晚唐五代敦煌三界寺藏経研究」(同氏主編『敦煌帰義軍史專題研究三編』、甘肅文化出版社、二〇〇五年)

奈良県教育委員会事務局、文化財保存課編『奈良県所在近世の版本大般若経調査報告書』本文篇(奈良県教育委員会、二〇〇五年)

落合俊典『金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究』第二分冊(文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、二〇〇七年)

李際寧『仏教大蔵経研究論稿』(宗教文化出版社、二〇〇七年、一七一～一八四頁)

野沢佳美「宋・福州版開元寺藏の題記について―整理と問題点―」(『立正大学文学部論叢』一二九、二〇〇九年、四五～八二頁)

『国家図書館蔵敦煌遺書』第四十四冊、第七十七冊、第九十二冊(北京図書館出版社、二〇〇五～二〇一二年)

池麗梅『統高僧伝』研究序説―刊本大蔵経本を中心として―(『鶴見大学仏教文化研究所紀要』十八、二〇一三年、二二三～二四頁)

總本山醍醐寺編『醍醐寺藏宋版一切経目録』第一冊、別冊 影印篇(汲古書院、二〇一五年)

附録1 『大般若経』 諸テキストにおける序文の有無一覧

No.	内容	高麗再 雕版	房山 石経	東禪寺 版	開元寺版	敦煌写本 三本	日本古写 経三本	中野版	大正蔵
1	「大唐三藏聖教序」(唐太宗製)	○	×	○	○	○	○	○	×
2	「大唐皇帝述聖記」(唐高宗製)	○	×	○	○	○	○	○	×
3	「大般若経初会序」(沙門玄則製)	○	×	○	○	×	×	○	○
4	初会四百卷(一卷～四百卷)	○	○	○	未見 (巻1を除く)	未見 (巻1を除く)	未見 (巻1を除く)	未見 (巻1を除く)	○
5	「大般若経第二会序」(沙門玄則製)	○	×	×	未見	未見	未見	未見	○
6	第二会七十八卷(四百一卷～四百七十八卷)	○	○	○	未見	未見	未見	未見	○
7	「大般若経第三会序」(沙門玄則製)	○	×	○	未見	未見	未見	未見	○
8	第三会五十九卷(四百七十九卷～五百三十七卷)	○	○	○	未見	未見	未見	未見	○
9	「大般若経第四会序」(沙門玄則製)	○	×	○	未見	未見	未見	未見	○
10	第四会一十八卷(五百三十八卷～五百五十五卷)	○	○	○	未見	未見	未見	未見	○
11	「大般若経第五会序」(沙門玄則製)	○	×	○	未見	未見	未見	未見	○
12	第五会十卷(五百五十六卷～五百六十五卷)	○	○	○	未見	未見	未見	未見	○
13	「大般若経第六会序」(沙門玄則製)	○	×	○	未見	未見	未見	未見	○
14	第六会八卷(五百六十六卷～五百七十三卷)	○	○	○	未見	未見	未見	未見	○
15	「大般若経第七会序」(沙門玄則製)	○	×	○	未見	未見	未見	未見	○
16	第七会二卷(五百七十四卷～五百七十五卷)	○	○	○	未見	未見	未見	未見	○
17	「大般若経第八会序」(沙門玄則製)	○	×	○	未見	未見	未見	未見	○
18	第八会一卷(五百七十六卷)	○	○	○	未見	未見	未見	未見	○
19	「大般若経第九会序」(沙門玄則製)	○	×	○	未見	未見	未見	未見	○
20	第九会一卷(五百七十七卷)	○	○	○	未見	未見	未見	未見	○
21	「大般若経第十会序」(沙門玄則製)	○	×	○	未見	未見	未見	未見	○
22	第十会一卷(五百七十八卷)	○	○	○	未見	未見	未見	未見	○
23	「大般若経第十一会序」(沙門玄則製)	○	×	○	未見	未見	未見	未見	○
24	第十一会五卷(五百七十九卷～五百八十三卷)	○	○	○	未見	未見	未見	未見	○
25	「大般若経第十二会序」(沙門玄則製)	○	×	○	未見	未見	未見	未見	○
26	第十二会五卷(五百八十四卷～五百八十八卷)	○	○	○	未見	未見	未見	未見	○
27	「大般若経第十三会序」(沙門玄則製)	○	×	○	未見	未見	未見	未見	○
28	第十三会一卷(五百八十九卷)	○	○	○	未見	未見	未見	未見	○
29	「大般若経第十四会序」(沙門玄則製)	○	×	○	未見	未見	未見	未見	○
30	第十四会一卷(五百九十卷)	○	○	○	未見	未見	未見	未見	○
31	「大般若経第十五会序」(沙門玄則製)	○	×	○	未見	未見	未見	未見	○
32	第十五会二卷(五百九十一卷～九十二卷)	○	○	○	未見	未見	未見	未見	○
33	「大般若経第十六会序」(沙門玄則製)	○	×	○	未見	未見	未見	未見	○
34	第十六会八卷(五百九十三卷～六百卷)	○	○	○	未見	未見	未見	未見(巻 600を除く)	○

中野是心版『大般若経』について(張)

凡例

一、本稿は底本の本文を左側に示し、右側に校本との異同を一覧にすることで、諸本の関係を概観しようとするものである。

一、対象とした底本・校本、並びに略語は以下の通りである。

底本…【中野本】「寛文十庚戌仲冬吉日、中野氏は心板行、板木細工人、藤井六左衛門」の刊記を持つ中野是心版

校本…【高麗再雕本】国際仏教学大学院大学附属図書館蔵高麗再雕版

【東禪寺本】宮内庁書陵部収蔵の東禪寺版

(<http://db.sido.keio.ac.jp/kanseki/>「bib Fram e.php?id=007075-001」による)の『大般若経』
卷一

【開元寺本】醍醐寺蔵宋版一切経(開元寺版)の影印本總本山醍醐寺編『醍醐寺蔵宋版一切経目録』別冊 影印篇(汲古書院、二〇一五年、三二～四三頁)所載

【思溪版(復刻本)】『宋版思溪蔵』(中国国家図書館、中華書局、国際仏教学大学院大学編集、揚州古籍出版社、二〇一八年)所載

【石経本】『房山石経』隋唐刻経四(中国仏教協会、中国仏教図書館、華夏出版社、二〇〇五年)所載

【石経本】	【BD.06687】	【S.3755】	【西北師大003】	【金剛寺甲本】	【金剛寺乙本】	【興聖寺】
— — — — — — — — —	○雲 ○ ○ 聰令 — — — — ○善念 ○ ○繁 ○	初雲 類濁 ○ 聰令 — — — — ○善念 ○ ○繁 ○	○雲 ○ ○ 聰令 — — — — ○善念 ○ ○繁 ○	○雲 ○ 含 聰令 — — — — 善念 ○ ○繁 ○	○雲 ○ ○ 聰令 — — — — ○善念 ○ ○繁 ○	○雲 ○ 含 聰令 — — — — ○善 ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
正智解脱 欠念 ○ ○ ○ ○ ○ ○				正解脱知 善念 ○ ○ ○ ○ ○		

附録2 『大般若経』 卷一テキストの諸本校異一覧

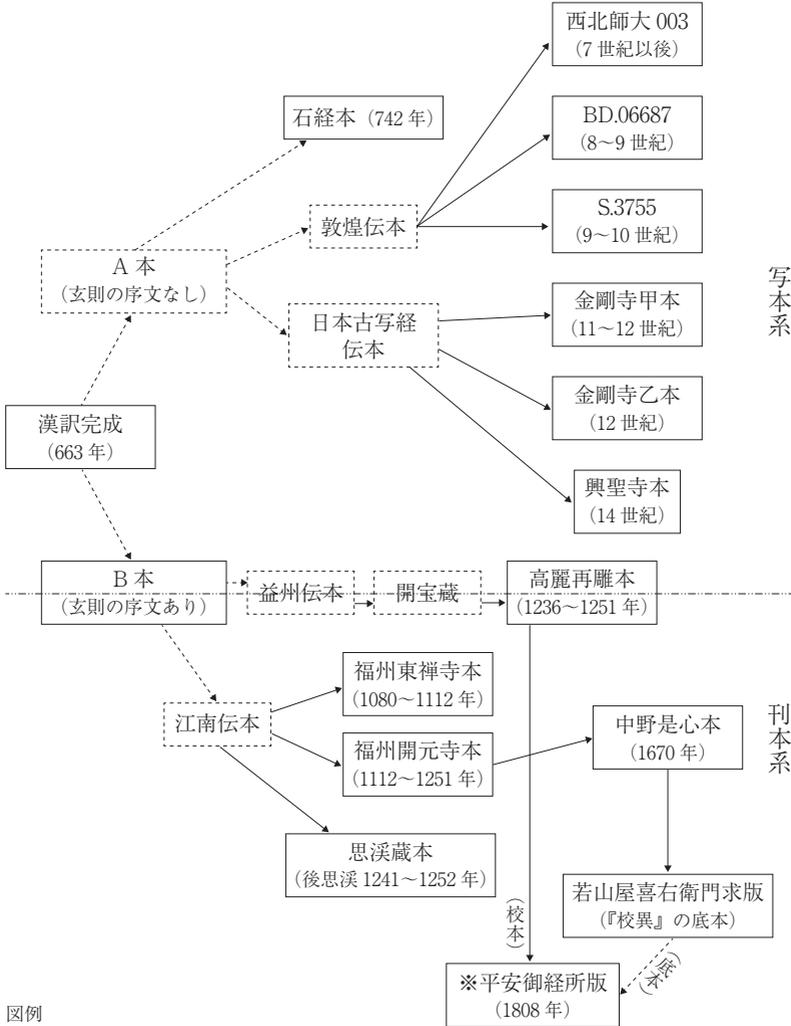
諸本校異 【中野本】	【高麗再雕本】	【東禪寺本】	【開元寺本】	【思溪藏(復刻本)】
9折4行 蓋聞二儀有像顯覆蔽以含生四時無形潛	○	○	○	○
17折4行 夫桂生高嶺零露方得泣其華蓮出綠波飛	雲	○	○	○
18折1-2行 由所附者高則微物不能累所憑者淨則濁類不能沾夫以卉木無知猶資善而成善況	○	○	○	○
21折2行 翔雲而共飛莊野春林與天花而合彩伏惟	○	○	○	○
23折1-2行 劣堯舜比其聖德者哉玄奘法師者夙懷聰敏立志夷簡神清亂亂之年體拔浮華之世	聰令	聰令	○	聰令
26折3行 鎮自非 聖德遠覃哲人孤出則玄音罕貨	方	賢	○	○
28折1行 二我為有封之宅宅我而舉則逐焰之水方	渴	○	○	○
28折3行 所振者想想妄而我不存蘊之所繫者名名	根	○	○	○
30折1行 品矣或謂權之方土理宜裁譯竊應之曰一	○	○	○	推
32折4行 辦棄諸重擔速得己利盡諸有結正知解脫	○	○	○	○
35折5行 門離見隨眠捨諸纏結智慧通達諸聖諦理	○	○	○	○
38折2行 願於十方界無數諸佛等持正命常現在前	念	○	○	○
45折2行 手兩掌十指頂頰頰頰頰頂兩眉兩眼	咽	○	○	○
51折3行 及六欲天皆憶宿住歡喜踊躍同詣佛所以	○	○	○	○
60折4行 無量廣天廣果天無煩天無熱天善現天善	繁	○	○	○
95折4行 焰如來致問無量少病少惱起居輕利氣力	○	○	○	○

中野是心版『大般若経』について(張)

- 【BD06687】『中国国家図書館藏敦煌遺書』九十二冊(北京図書館出版社、二〇〇八、二〇九～二一〇頁)所載
- 【S375】『敦煌寶藏』三十一冊(新文豐出版社、全一四〇冊、一九八一～一九八六年、一九一～二〇三頁)所載
- 【西北師大003】『甘肅藏敦煌文獻』第三冊(甘肅人民出版社、一九九九年、二二五～二三六頁)所載
- 【金剛寺甲本】 日本大阪府天野山金剛寺所藏一切経本
- 【金剛寺乙本】 日本大阪府天野山金剛寺所藏一切経本
- 【興聖寺本本】 日本京都市上京区圓通山興聖寺所藏一切経本
- 一、本文の字配りは中野版の翻刻文に依った。異説が認められる文字に下線を施し、行頭にその折数と行番号を附した。
- 一、底本と校本の相違について、一致する場合は「○」を示し、異なっている場合は該当文字を記した。
- 一、該当箇所が存在しない場合、「―」で示し、また、該当箇所が元々存在していたが、欠損している場合は「欠」で示した。
- 一、字体は原則として旧字体を用い、字体の相違は校異の対象としない。

写本系

刊本系



図例

- 確定できない伝本は [] で示す。
- 確定できる伝本は □ で示す。
- 諸本の関係が確定できない場合 ----- で示す。
- 諸本の関係が確定できる場合 ----- で示す。

※平安御経所版については『報告書』(12、24~25頁)を参照。

文化五年(1808年)に刊刻された平安御経所版は、その版元が「若山屋喜右衛門」であるという記述によって、釈祖芳『校異』の底本である若山屋喜右衛門求版(中野版)を底本として作られたものと思われる。

附録3 『大般若経』巻一諸本の系統図

土肥義和『燉煌氏族人名集成…八世紀末期～十一世紀初期』（汲古書院、二〇一五～二〇一六年）

方廣鎰主編、李際寧、黃霞副主編『中國國家圖書館藏敦煌遺書總目錄』第四冊（中國人民大學出版社、二〇一六年）

張美儔「釈祖芳輯『大般若経校異』について」（『印度學佛教学研究』第六八卷第一号、二〇一九年、一三八～一四二頁）

【附記】 本論文の作成に当たり、『大般若経』卷一諸写本・刊本の所蔵機関として、金剛寺、興聖寺、宮内庁書陵部図書寮文

庫、慶應義塾大学附属研究所斯道文庫、国際仏教学大学院大学附置日本古写経研究所御当局、及び中野版を所蔵する某氏より格別なご高配を賜った。ここに記して、関係各位に深甚の謝意を申し上げます。

Summary

On the Nakano Zeshin 中野是心 (?-1677) Edition of the **Mahāprajñāpāramitāsūtra* 大般若經: Focusing on the First Scroll of the **Mahāprajñāpāramitāsūtra*

Zhang Meiqiao

The Nakano Zeshin 中野是心 edition of the **Mahāprajñāpāramitāsūtra* 大般若經 is a woodblock print edition made by Nakano Zeshin 中野是心 (?-1677), a member of a famous family of traditional publishers in premodern Kyoto (17-18c). After it came out, its woodblock was inherited by Wakayamaya Kiuemon 若山屋喜右衛門 (dates unknown) and became the basic text of *The Collation of Variant Readings in the *Mahāprajñāpāramitāsūtra* 『大般若經校異』 edited by the Rinzai monk Shaku Sohō 釋祖芳 (1722-1806).

The study, which focuses on the first scroll of Xuanzang's 玄奘 (602-664) translation of the **Mahāprajñāpāramitāsūtra*, suggests that its *stemma codicum* could be divided into two lines depending on whether Xuanze's 玄則 (7-8c) Preface to the First Assembly of the **Mahāprajñāpāramitāsūtra* 大般若經初會序 is included or not. Furthermore, my collation of various versions reveals that the Nakano Zeshin edition is extremely close to the Kaiyuansi 開元寺 edition, which belongs to Southern 江南 lineage of the Chinese Tripiṭaka transmission. We can therefore conclude that the basic version used by Nakano Zehsin for his edition was the Kaiyuansi edition.

However, the Kaiyuansi edition and the Nakano Zeshin edition are not the entirely identical. We can also find such differences as the allographs used or the exact place where a new paragraph begins. There-

fore, the Nakano Zeshin edition can be said to be a new reprint based on the Kaiyuansi edition rather than a mere copy of the latter.

All these findings confirm the fact that the Fuzhou editions 福州版 (in this case represented by the Kaiyuansi edition) of the 12-13th Song Dynasty Buddhist Canon were used by Japanese editors to produce new reprints which circulated in the 17th century.

*Postgraduate Student,
International College
for Postgraduate Buddhist Studies*

中野是心版『大般若経』について(張)